

大と小との兼ね合い

小崎 直一 (NOSA I 岡山OB)

岡山県農業共済組合連合会を退職して6ヶ月、OBと言われれば「そうだなあ」と十分納得をしている今日この頃である。退職に際しては、関係者の皆様に色々ご心配をさせていただいたこと、紙面を借りて厚く感謝申し上げる次第です。

さて、私はというと、大と小との兼ね合いがちようどいい案配になっているので、その話をしてみたい。大と小といっても大便と小便の話ではなく、大動物と小動物の話です。

まず小動物の話から。縁あって岡山理科大学専門学校で動物看護師を目指す学生に講義を行っている。内容はどうしてもイヌ、ネコが対象で、小動物、コンパニオン・アニマルという部類になる。大学を出て35年、大動物の仕事をしてきて、ましてや大学でもほとんど小動物は習っていない。このような状態で講義ができるのか心配であったが、嬉しいことに35年前の教科書、家畜〇〇学が結構役立っているのである。ちなみに現在では教科書はすべて獣医〇〇学となっている。家畜と表示するとイヌ・ネコは教えないのかと問い合わせが来るそうである。

近年の獣医師にとっては、あたりまえの話なのだろうが、教科書には人の医学書と変わらないことが載っている。「類医学だ」と大学の先生が胸を張るのもうなずける。

ところで、この大動物、小動物という名称なのだが、大動物は産業動物という良い名称を獲得したが、小動物という名称は一般的にも学生達にもぴんとこないようだ。

話は変わるが、NOSA I 岡山にも昨年からは女性獣医師が入会してきている、女性獣医師の活躍は全国的にも注目されているのだが、NOSA I 岡山でも例外ではないようだ。

NOSA I 岡山では毎年8月に研究発表会を開催しているが、彼女たちは入会してわずか4ヶ月の間に症例報告をまとめあげ、りっぱな発表をしている。

彼らの発表を聞いていると、産業動物学会ではデータを蓄積、または症例を集積したものが良いとされ、症例報告は軽く見られてきた感があるのだが、これからの産業動物獣医師、産業動物〇〇

学のためには、症例をとことん追求していく小動物的手法も取り入れていく必要があるのではないかと思っている。

次は大動物の話。これも縁あって微生物飼料「B L C S」の技術顧問を拝命している。

B L C Sとは耳慣れない言葉だが、バイオ・ライブストック・クリーン・システムの略で、「微生物を利用して家畜を清潔に、そして健康に飼育する方法」ということになる。

鶏ではすでに鶏卵のサルモネラ・フリーをキャッチフレーズに堆肥にまで付加価値をつけてシステム化している会社もあるが、牛ではこれから注目される存在になるであろう。

なぜかという、いま話題になっている地球温暖化の原因の一つと言われている「牛のゲップ」に一石を投じているのである。この微生物飼料を与えると、乳牛で最大37.5%のルーメンメタン生成を抑制する効果があり、牛に後ろめたい思いをさせなくてもいいのである。

さらに第一胃から糞尿まで、つまり下痢、軟便による体調不良から、肥育牛では増体率および肉質の向上。乳牛では乳質の向上、特に体細胞数の減少が期待できる。また糞尿中のアンモニアガスの発生が少なくなり牛舎、周辺環境が改善される。他に特筆すべき点はサルモネラに対して抵抗性があることだ。

このようにB L C Sは微生物製剤の特性を遺憾なく発揮してくれる。おかげさまで県内でも活用していただいている畜産農家が増えてきており、夢はこの飼料が県内に広まり、岡山県の乳質の向上に貢献できればと考えている。

合わせて、産業動物獣医師の益々の活躍を期待している。動物看護師の将来は、獣医師の双肩にかかっている、小動物のみならず産業動物にも職域が拡大できればと望んでいる。

こんな具合で支離滅裂な文章になりましたが、頭の中は大と小が入り混じり、獣医学を満喫している今日この頃である。